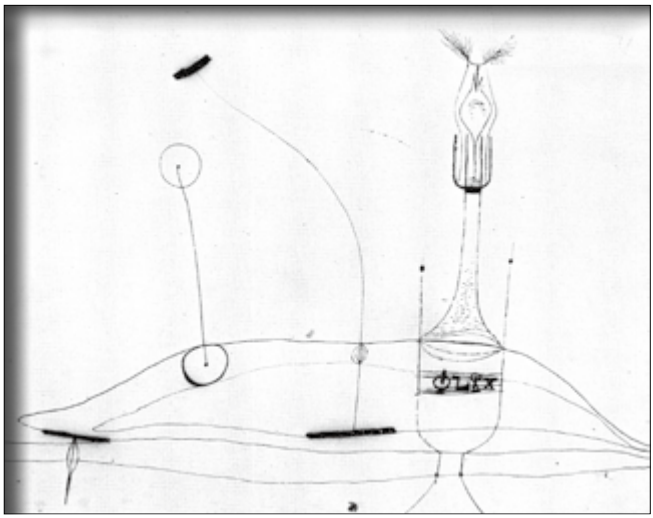
あさ 4

2013

善福寺川

どんな抽象的形象の中にも、原型へつながる
糸を感得できる

パウル・クレー



Klee
クレー
征服者のための磁気記録装置

ファブリ世界名画集
平凡社版より

あさ

四　月

蕪蒸　　佐藤喜孝

いつまでも力を抜かぬ古すすき
宇宙遊泳してゐるくだらくわんぜおん
枯枝の密密とある金閣寺
冬の庭短くかかる滝の音
こゑひくき人ばかりなり蕪蒸
風花のころがる三十三間堂
煙草屋も五重塔も冬構

「人は希望を与えられ、それを燃料として、目的として人生を生きる。希望なしに人は生き続けることはできない。」　《1Q84》村上春樹

私の目の前に毎日現れる男は誰だ。白髪の様子では私より年長のやうだ。小鳥が肩をつついてしようがない。カーテンの後ろにも何かゐる。名前は知らないが、あの男が来たら調べて貰おう。希望はこの訳の分らぬ家をぬけだし娘のところへ行くことだ。そんなに遠くないはずだ。ご飯がきた。手が震へて箸で食べれない。が、素手で食べればなんのことはない。食べたら眠くなった。小鳥がまた頭の上に来た。私には希望がある。娘のところへ行くのだ。今日の鮨はうまかった。明日は天丼と注文しておいた。あれ、オブがあるぞ。いつもの薬を飲むのだな。呑んだら寝やう。私は忙しいのだ。

山椒魚

竹内弘子

芽柳や魚屋水を流しづめ
大島を鯨とも見つかげろへる
養魚場すこし離れて田水張る
山椒魚みじろぐといふことをする
山椒魚醜の目鼻のありどころ
山椒魚たれか悲恋をわらはざる
鰭酒や軍歌春歌とわかちなき

鶯餅

田中藤穂

臘梅の山へ観光馬車に乗る

節分や句読点めく訃がひとつ

淡雪や老いて銀座も遠くなり

春時雨ささくれに貼る絆創膏

着替へして鶯餅を買ひにゆく

春浅き酒蔵の水溢れをり

対談は佳境に入りぬ花ミモザ

佐藤代表が小さい頃の遊びのことを書いていらしたので、私も昭和初期の子供の頃の遊びを書きたくなった。近所の子が寄って庭に茣蓙を敷いてお飯事。雨の日は廊下で鞠つき、塗絵、お手玉、オハジキ、紙の着せ替人形、リリアン編み、ビー玉、天気の日は外で鬼ごっこ、かくれんぼ、ゴム段、下駄かくし、お手玉ほうり、通りゃんせ、石蹴り、陣取り、男の子は帽子の鍔を後に向けて被ってカイセイドン。私は男の兄弟の中で育ったので面子もベーゴマも竹馬も結構上手くて独楽回しや凧揚げの仲間にも入れてもらって愉しかったなァ。

夏の夕昏になると飛鳥山の方角から蝙蝠が飛んでくる。ああ、とても一度では書き切れないので、続きはまた来月に致します。

菜の花

長崎桂子

宅配の車溜り場野水仙
寄鍋や風吹き荒び積る夕
電車待つはや薄白く春の雪
菜の花や空の青さのいや増さる
整然と株並びゐて花菜風
小躍りをする児菜の花日和かな
菜の花の香に集ひたり飛び交ひて

気がついたら庭の千両の実が一粒も落ちていないから、何かが来て食べていったのであろう。

声も聞かなかったし、影も見る事もなかった。このところ、自分が如何に足腰の痛さにかまけて、外の事に散漫であったかと、反省をしきりにする一日である。

それ故に、通院と毎日精進して少しでも快復できますようにと、努力する事にします。

雪

早崎泰江

人住まぬ家にまばゆき屋根の雪

落葉踏む猫にも老いの兆しあり

熾烈なる縄張争ひ猫の恋

なかなかに心ひらかぬ梅の花

古木の洞埋めるごとくに春の雪

春日の次から次へ鳥の声

あと一句ただよひきたる沈丁花

蝋梅　　森理和

節分の豆は撒かずに鉄火味噌
蝋梅や次の休みに兄来ると
屋根葺くは静かな響き冴返る
小米雪間引玉葱蒸し物に
夥し黒点徐徐に寒鴉
静まりの愁ひ秘めをる雛飾る
曾祖父の接ぎし椿の四色咲く

風邪・金欠病と二人欠け、三人で遅い新年会をしました。
銀座の鉄板焼のランチ、『八竹（はっちく）』の押し鮨をお土産に買い、築地本願寺、・歌舞伎座・銀座四丁目へとブラブラしました。歌舞伎座と後見の様に超縦長の白いビル。耳にした批評をなる程と思い、バランスの大変さを痛感させられました。
歩道に出た建物の三段程の石段に一人が躓き転んだ。居合せた岩手物産館の方が館内の休憩所に案内して下さり、私達が帰るまで付き添って心配して下さった。薬局へ走った一人。雑穀米・ハムソーセージ・漬物等々何事も無いかの様に買物をした私。翌朝、炊き立てのお握りと漬物を届けるまで自己嫌悪に陥り、右足首捻挫本人も、楽しい流れを断ち切りすみませんと、シップを買って来た人も余計な事をしたのではと半信半疑。己に帰り皆が皆反省頻り。それでも来月はお花見ねと計画中、

❀

吉弘恭子

銀杏のころがる石階闇しづか

一太刀をあびし柘榴の揺れやまず

かぎろひて木々の間にもぐりこむ

もの種のてのひらにあるぬくみかな

薄氷の小風にまかす安堵かな

吾が影を追ひかける猫冬日和

竹林を颶風が抜ける開戦日

梅日和　　赤座典子

春立つ日狐の嫁入り通り過ぐ

淡雪のスペイン瓦煌めかす

赤ペンと競馬新聞春の風

初椿待ちかね椋鳥の通ひ来る

母の名の由来を聞きし建国日

開き切り蕊の色消す濃紅梅

梅日和吾より小さき人多し

札幌雪まつりを見たかったので冬の道南を巡る三泊四日のツアーに参加した。

列車とバスで行き着いた、北の大地は、どこも白一色で覆われていて空と大地の境目が判らない。今年は特に大雪で、除雪用の予算を追加したという。生活するのは、さぞかし大変であろうと思う。

その中で、観光客を呼ぶためばかりでなく、地元の人々も元気でいられるようにと　様々な工夫が凝らされていた。函館・札幌以外にも大沼公園・支笏湖等の　雪や氷の祭典も、皆見事であった。

すべての人が、春を待っている気持がひしひしと伝わってきた。

四日間通しの　ガイドさんの訛と歌で　今時懐しいバス旅であった。

❀

井上石動

朧夜の徒(かち)の月光仮面かな

九鬼山のふはと押しだしおぼろ月

鳶の笛上国甲斐は春のなか

狐川辛夷の中を流れつゝ

遅き日の惣菜にほふ町に降り

永き日や父子の泛子の立ったまま

春の燈や高き声洩る博奕宿

いづこも同じ……

2月号で定梶さんが「紋切型措辞」について述べられていた。

「いづこも同じ」で、山梨でも盛ん。「農に生く」など、はいて捨てるほど。他業者が「漁に生く・林に生く」などとはいわないところをみると、農民の傲慢さすら感じる。

富士（真向ひに・を背に・よりの風・の湧水）、（平凡・清貧）に生きて…などは日常茶飯。背は伸ばし、カンナは燃え、香りはほのと、雪は霏々と…。

「どうせ俺らうまい作はできないが、せめてこういうお定まり表現を避け、少しでもマシな『私の一句』を作ろうじゃないか！」と仲間にも言っている。

芸は「真似る」もの。どうせまねるなら、いい言葉をまねたい。記紀万葉、王朝文学、謡曲、江戸俳諧、明治の・池波藤沢の小説、落語講談などは、言葉の宝庫だと思っている。原典へなどはとても手がでないものは、アンチョコでも学びたいもの。

セロリ・トマト　大日向幸江

畑焼くも対の家鴨の逃げ出しぬ

野仏のあたま丸く春の雪

一対の鴉斜めに雪模様

手をかざし春一番の街を行く

春一番鴉の掴むポリ袋

春一番女心のやうに揺れ

セロリトマト食べ三月を迎へたる

この頃生で食べる野菜にこっている。この前まで良く食べていた根野菜は見る気もしない。赤い色のコートの女以来なぜか根野菜を食べなくなった。

去年の十二月だったが、赤坂の地下鉄の駅の階段から落ち自分が自分を取戻したのはあの大雪の日だった。窓の外の白い色、病院の白い壁、なにもかも過去を忘れさせてくれる。このまま深い眠りに入りたかった。二度と目覚めぬ。世の中の裏社会で生きた自分を誰も心を留める事はないだろう。静かに雪を見ているうちに胃袋からの要求があった。雪のように冷たいセロリを食べたい。食べると力が出て来るような赤いトマトを齧りたい。香りの強いパセリも食べたい。

その時から食べた食べた。野菜のない時は小岩井の野菜ジュースをよく飲んだ。二月二十八日、まるで別人のような男となって退院をした。暖かく今まで太陽など見もしなかった。僕が空を見上げ深呼吸をした。

節　分

木村茂登子

年女に成り済ましたり節分会

中味より海苔の歯応へ恵方巻

ものの芽の人より堪えてゐる二月

行き過ぎてマスクとマスク振り返る

味噌汁のための一つを蕗の薹

微笑みをみな俯けて梅の花

春めけり街の六ツ角七ツ辻

私は庚年生れの八十三才。来年平成二十六年が年女であるが、鶴見の総持寺では毎年節分にその年の干支に関わらず年男年女として二百名募集していることを知り、来年まで待ち切れない思いで今年応募した。

袴を着付けてもらった気分は少し窮屈ではあるが身の引き締る思いがした。

会場の千畳敷の太祖堂にはすでに溢れる程の人が入場してをり大拍手をもって迎えられ、江川辰三貫主の節分追儺式の法要のあと、仏前に供えられた一升枡に入った小袋入りの豆を渡され、待構えていた人々に向って豆まきが始った。豆はどんどん追加され、年男年女のまくほかにも若いお坊さん方が背後から盛大にまくので入手できない人はいない。

21頁へ

待春

篠田純子

矢の如く跳び出す雀春立つ日

歌舞伎座のつるりとむけて春を待つ
落成まぢか

啄みて尿残して日脚伸ぶ

春寒の銀座の路地に猫のエサ

幾度も掴まんとして陽炎へり

春燈糸のもつれを断ち切りぬ

木の芽どき坂道で会ふメニエール

仕事で外回りをしているといろいろな発見がある。

先日港区芝浦を歩いていたら、酒蔵を見つけた。ふらりと寄ってみる。店の人の話では、二年前から始めたと言う。しかし元々は二百年前の江戸時代に創業し、明治末に廃業したのを再開したのだと言う。『江戸開城』というどぶろくを、試飲させてもらうと濃厚な味で、一本購った。従兄が古稀なので祝いの品にと紅白のセットも買った。幕末には西郷隆盛、勝海舟、坂本龍馬も飲みに来たという薩摩藩御用達の『若松屋』は今、醸造という店名になっている。

その夜は、江戸無血開城の話を肴に一杯やった。そのうち薩摩藩上屋敷跡や、西郷・勝が会談した所などを、家族で散歩しようと思っている。

電　線　　定梶じよう

ひびきけり役場の午報凍て山河

図書館が閉館の森梟啼く

冬尽きぬとくとく満たす醤油注し

犬のゐて道が行きがて良寛忌

うすら氷に霰の玉のころびたる

余寒とは三毛が占有ひとの膝

大いなる春月電線に引っかかり

ある句会に次のような作品が投句された。〈汝を讃ふ四月一日生れなれ〉。

此の句会参加者には、国語の先生、国文学科で源氏を専攻した方、文語文法に関しては一言ある男性等。掲句について一悶着ありそう、と思っていたら案の定。ひとりが「生れなれ」と已然形で結ぶのに「こそ」をとらないのは誤った使い方だと。ひとりは「生れなれば」を省略したものだろう、と好意的にいえばもうひとりが、文語にはこういう場合「ば」を省略する例を見ない、と。で、原作者、「四月一日生れなり」と断定の形をとるには少しく遠慮があったので「生れなれ」と置いたと。句歴数年の参加者のひとりが怖ず怖ず、「生れかな」ではいけませんか、と発言して議論は終った。

❀

須賀敏子

山茶花の開き過ぎたる花ばかり

除雪車は戦のごとく走り来る

もう一缶買はねばならぬ春の雪

北国へ梅一輪の写メールを

如月や錦眼鏡に倦きもせず

外つ国のパプリカ求む春淡し

春一番人形展のドア開く

三月作品より

佐藤喜孝

冬銀河ちひさくちひさくちひさくなれ　竹内弘子

読んですぐに「董程な小さき人に生れたし夏目漱石」を思った。きっと作者もこの句が頭にあったであらう。大きな宇宙に思ひを馳せると、人間の存在がどんどん小さくなって行く。何回も〝ちいさく〟といはれるとおまじなひのやうに効いてくる。小さくなることへの願望心理はだういふことなのであらうか。おまじなひで堀内一郎さんからおまじなひの本のコピーをいただいたことを思ひだした。

雪片の降り込みざまに川流る　竹内弘子

「ざまに」で川に降込んだ雪はしばらく流れに乗って川下へうごく様子がわかる。陸続と降る雪と水の流れが織りなす動く叙景句。〝ざまに〟で一読流れの早さと降雪の激しさをおもはせる佳句。先月定梶じょうさんの「大根の葉の流れ行く早さかな」についての文を興深く読んだ。知らないことばかりである。大根の葉は緑でなければ流れのスピード感は出てこないとおもふ。

一時間一本一輌冬菜畑　森理和

ローカル線が一時間に一本一輌編成で通る。簡潔な表現ながら冬の畑や枯田の中を揺れながら走ってゐる長閑なローカル線が見えてくる。〝一〟を二回使用なら

雪の日の浴身一指一趾愛し　橋本多佳子

が有名である。三回使用では

一村に一師一弟子棲みて雪　　斎藤　慎爾
一舟に一人一湾冴返り　　遠藤真砂明
一山に一庵一樹はるのゆき　　小澤　克己

など探すことが出来た。四句ともたたみ込でゆくリズム感がでてくる。講釈の張扇の音が聞えてくるやうで小気味がよい。

初富士は日本晴を背負って聳つ　　木村茂登子

正月らしく気宇壮大、瑣末なことを吹飛ばすめでたさである。作者の心の大らかさでもある。作者には五年前

初富士のほか何もない日本晴

がある。掲句は「背負ふ」といふ意気の高さで若々しい。前号の「松の内身すぎ世すぎはさておきて」を「見すぎ」としてゐた。申訳ない。

梅雨休み日本晴の富士拝む　　伊万里梅城
冠雪の富士にのみ雲日本晴　　林　翔
セーターにお日様溜る談話室　　斉藤裕子

「談話室滝沢」といふ喫茶店があったなと、この句を読んで思った。掲句の談話室は前後の句から病院内の談話室を詠まれたが、特定する必要はない。しかし喫茶店内ではお日様は期待できない。ので病院とか介護ホームなどの談話室が浮ぶ。お見舞に病院へ入る時は緊張する。入院する人はもっと緊張するはず。談話室は採光豊かな所に作られるやうだ。ジュースなどの自販機も置かれてゐる。一見町中の喫茶店にゐる感じになる。ただ黙って坐ってゐても病室にゐるより穏やかな気持になる。「セーターにお日様が溜る」の優しさに感心した。病院内は空調されてゐて夏冬寒暖に悩むことはないが、お日様が溜ったセーターのぬくもりは別格。

見て通りかへりも焚火見て通る　　定梶じょう
罠かけて来たり返り見山眠る

前句、往きに焚火を横目で見ながら通りすぎる。用を足して戻ってくるとまだ焚火がある。焚火に立ち止らずに通り過ぎたといふ句意。説明するまでもない。焚火には一人以上の人がゐたはず。が一見人には関心がない。ただ往復同じ焚火を見て過ぎたと云ふ、そのことに心の動いた作者。そのことをおやっとおもふ読者。説明は要らぬ句。詰らぬとおもふ人と、さうではないとおもふ人がゐる句である。

後句もおなじやうに説明の要らぬ句。ただ「見て通る」「返り見」に作者の心理を読み解く切っ掛けがある。かけてきた罠を見えぬのに返り見るといふこころのさざめきがこの句の眼目であり魅力。

15頁から

豆まきのあとには更にゲストによる抽選で十数名の人に景品が渡される。年男年女も控室に戻ってから空籤なしの抽選があり、記念品や弁当のお土産をいただきお開きとなる。

初めての袴の着心地や、会場では大拍手をもって迎えられ、豆をまく度に受ける歓声には興奮させられる。

この感覚は病付きになりそうだと思ったら、十年も二十年も続けて年男を勤めている人が何人もいることを知り成程と思った。

ゲストには裕次郎のお墓のあることから石原軍団と、横浜に関係のある会社の役員や、アスリート・俳優等で、時の人の様な派手さはないが参集の人々には満足のゆくサービスが行き届いているとの思いがあっ

前月抄

花の雨油塗れの油差　佐藤喜孝

ぼんやりの平和あはあは去年今年　須賀敏子

雪片の降り込みざまに川流る　竹内弘子

大寒の桜の枝の光りをり　田中藤穂

數へ日の僅かな青菜伊勢平野　長崎桂子

恙無く日々過ぎゆけり雑煮餅　早崎泰江

一時間一本一輌冬菜畑　森理和

おろぬきを大事に食べて年明る　吉弘恭子

冬木の芽問ひに答を得しやうな　赤座典子

全天の星降る樅の氷柱かな　井上石動

犬ふぐり水道会社の鉄条網　大日向幸江

初富士は日本晴を背負って聳つ　木村茂登子

セーターにお日様溜る談話室　斉藤裕子

やうやくに除染始まる凧　篠田純子

見て通りかへりも焚火見て通る　定梶じょう

喜孝　抄

八田木枯回想

その九

―夕焼けて西の十万億土透く　誓子

阿部寒林

木枯句を波郷が採った句が分かったので参考に転記しておく。

『現代俳句』―昭和二十二年七月号（波郷編集）

千年の落ちて漂ふ月の柘榴

手袋の手にて為すべき事一つ

妹が居へ深雪の上の靴の栄

帰り来て蒲団の母に仰がれぬ
兄弟老いぬ牛鍋の耳大にして
水薬枯草すかし山すかし
虹消ゆや顔を凹めて女給ゆく
蔦萌えの荒さよこの人栄知らず
鳥交る世にチンドン屋ある限り

その後同誌では自選投句を依頼したことがあるが、その時木枯はテーマを『誓子の下に』として発表している。

深川木場の長谷万グループを辞して実兄英雄、水沼岳子と共に二三年の間に富士経済というマーケティングの会社へ創立同様に移って倒産寸前を数年の間にA級の事業にしたのである。当時（昭和二十年代）日本の産業界で市場調査などという虚業が一人前の事業に育つか否か、余り信用されていなかったが、その後、映画『八甲田山』で如何に調査が大切であるかが広く理解されて大企業が利用する様になったことは事実である。（山岳ガイドを青森隊は軽視した）

木枯は長谷万グループの『八幡（やわた）産業』という賃加工（他店注文経営）の木工場の主任となり程なく責任者となり深川木場のド真中に於いて十数人を使用する立場となり

結構苦労をしていた。最初木工場は石島町にあったが後に東陽町から南砂町に移った。句作活動は『晩紅』が年に何回か刊行されたので新作は発表が出来たのであるが決して満足することはなかった。しかし実業の方は結局定年まで勤め上げて晩年を飾ることが出来た。

ぼくたちの『富士経済』は大伝馬町（地下鉄小伝馬町の真上）であったので、たまに木枯に電話しては新宿の『ボルガ』へ足を向けた。彼は上戸、ぼくは下戸であるが、この時代になると派手な遊興など全くなくなっていた。『ボルガ』は俳人中心と言ってよい位の客層でいつ行っても俳人の誰かに会うことが出来た。小説家の上林暁などが『諷詠詩人』を執筆したりしたのもこの時代である。

或晩『ボルガ』でオーナーの高島茂から止り木で飲んでいた橋本夢道を紹介された。『俳句人』中心で左翼活動の第一人者であることを知っていたので尊敬していた俳人である。句集『無禮なる妻』『良妻愚母』がある。自由律界の中心であり栗林一石路と双璧でもあった。

ぼくが夢道に接し、興味を持ったのは以前銀座の『月ヶ瀬』の従業員であったということ。そして当時都電〈市電〉やバスなどの広告に次のような十七音の広告文が掲示されていたのであるが、これは木枯は全く知らなかった。もっともこの時代は昭和十年代であって戦後は消えてしまった。最晩年に入った木枯と久しぶりに『あを』の

夜の句会の時、昔夢道が『月ヶ瀬』の宣伝句として作った次の句を示した。

みつ豆をギリシャの神は知らざりき

これが銀座『月ヶ瀬』の宣伝句である。

木枯と二人だけの話題であったが彼はまず今日まで知らなかったこと。現在でも立派に通用する俳句だと絶賛した。この夢道句を知っている俳人は恐らく数えるほどしかいるまい。初め夢道は『層雲』に寄ったが後俳句弾圧などの事件もあり『俳句人』に力を入れた。古沢太穂などもこの店で知った。

この時代の『ボルガ』を書くと切りのない位に話題があるので省略させて頂く。

話題は飛ぶが二〇〇五年の『晩紅』にまとめて木枯の故人への哀悼句が連載されてあったので参考のために転記しておく。次の通りである。

平成八年一月十二日深夜次女か刈の婿武田正敏、交通事故のため即死す

正敏よ寒星となれ鞭となれ

真実・実樹・か刈・残花の百ヶ日

平成八年十月十三日、伊賀上野行・杉田桂ほか

ふるさとやふりむきざまに松の鵙

霧ごめや伊賀の組紐端を余し

伊賀の夜は長し芭蕉のころは尚

平成九年二月二十七日。凩句会・久保とし子ほか

枝垂梅しだるるにまだ間のありぬ

平成九年九月十一日。平畑静塔先生の死

人の死を露の言葉に置きかへる

平成九年九月二十六日。真実・実樹すくすく育つ

運動会拍手のあとの浮雲よ

平成十年十月十八日。晩紅塾句会　第一回

狐火の慶子繚乱うたがはず

平成十年十一月十七日午後四時五十七分。兄逝去

小春日のわがはらからよ水泡よ

平成十一年八月十二日。晩紅塾歌舞伎吟行

狐火のあとは鬼火や篠つく雨

くらがりに目ン玉濡らす夏芝居

平成十二年一月十五日。晩紅塾歌舞伎吟行

春待つや胸に鼓の白拍子

作者は意図的に前書を付けているが特に次女の家庭に生じた最大な不幸の句は当時何も知らずにいただけに驚いて木枯に訊いたことは記憶の中にある。こういうとき不治の病床にあった智恵子夫人の嘆きは幼い孫二人が存在しているだけに今日想像したけでも哀しい出来事であった。なをこの誌面で長兄進氏の逝去を知ったが上京後一～二度会っただけであったが温厚な人柄のようで好感の持てる人であった。（終）

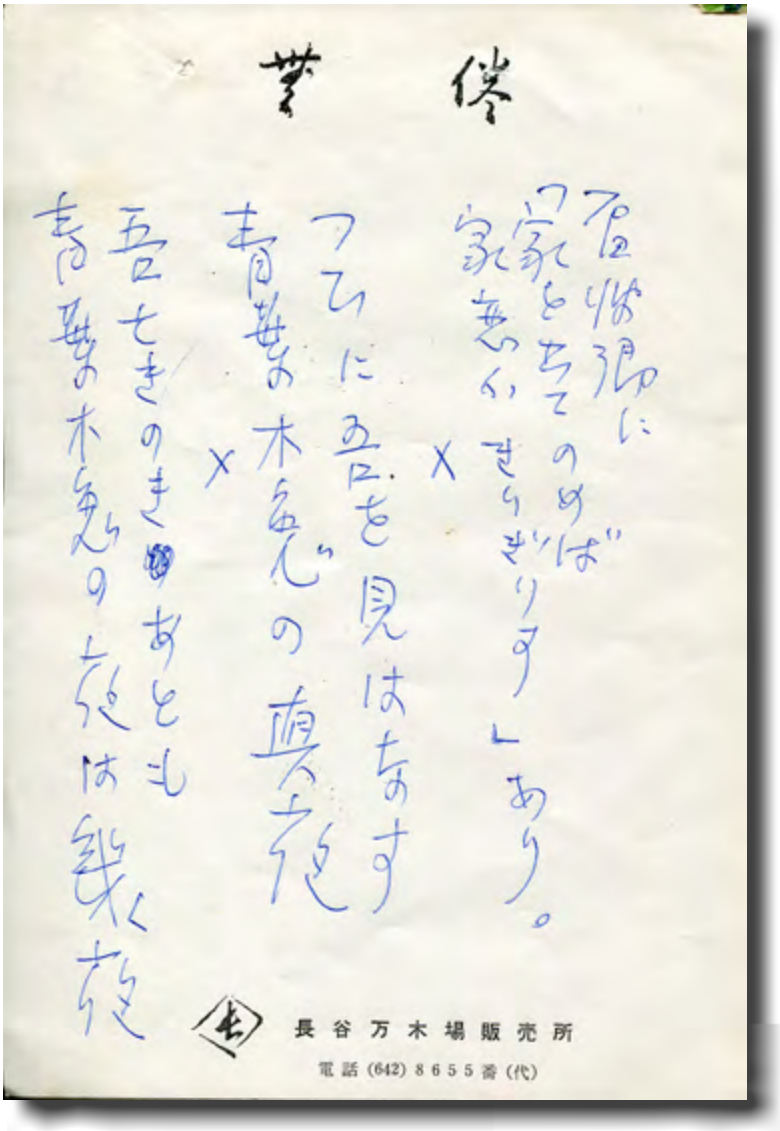
＊　＊　＊

以上が木枯没後、すぐ執筆し貯められた拙文である。

運悪く平成二十四年十月初めに急病のため入院、慶応病院へ約一ヶ月。年末に又「東京衛生病院」へ入院、内科は平穏であったが圧迫骨折のため執筆不能となってとうとう木枯逝きて一周忌の日となってしまった。

まだ家から一歩も出れないので激痛を我慢しつつ身近な兄姉たちにお詫びしている次第です。

（平成25・3・19）



八田木枯直筆

1970年5月

「無倦」は「あきない」と読む。「亡きのき」は「亡きのち」〈寒林〉

春風や昭和は雲の中にある

雪を忘れて何年になろう。東京の雪景色が恋しくなった。私にとって二月は大事な年で二月一日は母の命日、その二十六日に例の二・二六事件があった。悲しみを抱いた少年は急の学校休みで早朝、母校の裏門から校庭の雪景色を覗いていた。二月になると思い出す雪と悲みの日々、これは一生ついてる廻ることだろう。亡母の代わりに生まれた妹も七十才になって健在である。従って私十才年上の八十才。先日、練馬春日町の教習所で高齢者運転講習も終え、都庁舎で無事免許更新を済ませた。

〈二〇〇七・四・二五〉

卒業式大声で田螺泣く

三月二十九日「あを」の佐藤喜孝氏に誘われて哲学堂へ。花もほころび園内は花見客で溢れていた。あちこちに難しい碑が立ち並び哲学堂らしい固さである。哲理門から始まり四聖門、意識駅、理外門、主観亭、理想橋、概念橋、唯心庭、倫理淵、等々きりもなく厳めしい。ここで何年振りで八田木枯先生に出会えたのは嬉しかった。桜より辛夷の花に見入っていた事、ベンチに座って集中している姿は、往時の高島茂氏を思い出していた。句会では勿論杯を重ねた。俳句も衰えなし、思い出の日になった。四月五日町内婦人部で新宿御苑へ花見に、私は後から覗きに出掛けたが苑内は満員どこに座っているのやら、千駄ヶ谷門の方まで一巡したが見当たらず諦めて帰りがけに帰路大木戸門近い一たむろで偶然、彼女らを見つけた。挨拶にハーモニカをひと吹き(故郷)さよならした。たのしく忙しき一日。

〈二〇〇九・四・一六〉

能登だより（2）

定梶じょう

喜孝さんは、気の利いた題ではないが、と仰有りながら表題を付けてくれました。テーマがどう飛んでもいいように、との気遣いを頂いたわけですが、さて。まあなんとかなろうかと。で、少し続けさせて頂くことにします。

前回でも申しあげましたが、能登は保守色が強い。それもまあ仕方のないことですし、保守即ち悪とも言えないわけで、昭和三十年代までは『ホトトギス』一色ではありましたが、それなりにすぐれた俳人もあったようです。やがて『ホトトギス』の句にあきたらぬ人達が『天狼』や『寒雷』、波郷の系列につらなり、あるいはそこから派生した俳誌に投句するようになります。私自身、そんな事情には一切無知でしたけれど、やがて上京して少し違った傾向の俳句があることを知ります。やがて帰郷して数年の中断のあと再び作句を

開始。当然のことながらわが住まう町には『ホトトギス』系の句会しかありませんので、そこに参加することになります。

私は、語彙に関わって疑問に感じたことやこれはと思ったことをメモしたノートを作っていて、それが今役に立つわけですが、その中に拙句、〈巴里祭なので物干台の満艦飾〉を出句して、大いに批判されたことが記されています。東京での句風を引きずったまま『ホトトギス』の句会に出席すれば当り前なのですが、当時三十歳過ぎの私には思いもかけぬ批難、と感じたに相違ありません。年経た現在ならもう少し定型に近づける工夫をしたでしょうが。そしてそのノートによると、批難の論に二点あって、「巴里祭」を季語として認めない（ホトトギスの歳時記に収録されていないから）ということと、巴里祭だから物干台が満艦飾になることの因果関係が理解できない、これ索強付会、要するにこじつけであると。この「こじつけ」なる言葉はその句会にはよく遣われていたようで、私と句作りを同行する句寿夫さんも、私以前にその句会でやっぱりそう言われて我を折り、ついに出席しなくなった、ということがあるのです。寓意偶因が全く理解できぬ俳人の集まりですから、申しわけない言いようですがその句会は退屈の一語に尽きる。七句選と決まっていても一句か二句しか採れない。それでも一年ほど出席が続いたのは、母・兄・叔母が同人であったことによる。その母兄叔母も近年次々亡くなって、新しい方々がその会を守り続けていらっしゃる。その句については先号で書いた通り。

そんな中、合同句集を作ろうという気運が出てきました。その結実が『句集もんぜん』所属結社を越えた半島初の合同句集でした。いくらかをその中から。

栗ごはん供へ神さま仏さま　池腰伊豆子
客殿の灯（あか）り総持寺五月闇　稲垣みち子
戦功の碑よ空蝉のすがりつく　奥村　至峰
時雨るるや能登線婆が乗れば発つ　蔵本　丈晶

「婆」は行商のお婆さんでしょう。以前はともかく行商人が多かった。今はスーパーマーケット。

風鈴も吊して海女の泊り船　　坂本日出二

この「泊り船」は碇泊している船のこと。夜泊の意ではありません。私自身海女の童女が手鞠を持って島渡りする船に乗り込んだのを見たことがあり、句にしたことがあった筈ですが。

大ぞうけ小ぞうけ並べ師走市　　竹島　夢道

「そうけ」は「笊笥」。ざるのこと、西日本でいう、と辞書にある。

神無月高砂の軸売りにくる　　竹森　筍子
水止めの赤土一荷冬田かな　　中川句寿夫

金沢の句会ではこの句認められなかったが、『雲母』で龍太がとってくれました。

入渠してデッキに午後の散る落葉　　早見行々子

船員さんの句。「入渠」は、修繕のためにドッグ入りすること。従って大海原を航行中には絶対あり得ぬ落葉が甲板にあった。そして作者の勤務時間が午後より始まったのです。

総持寺の大虫闇と云ひつべし　　谷内　大川

「総持寺」は鶴見のそれではなく、「総持寺祖院」が正確な名称。我々は「本山」と通称しています。能登から横浜へ移建の際に、相当悶着があったそうです。掲句、「大虫闇」の措辞を認めるかどうかが成否を決めそう。

山の端に傾く月のパナマ航く　　吉岡　呑洋

「山の端に傾く月」はこの上なく凡、ですがパナマ運河を航く、とあれば凡ならず、でしょうか。

釣船の出てゐる二百十日かな　　吉田　錆矢

以上十二句ほど上げましたが、ホトトギス系以外の人は三人のみ。私の好みに偏って採ったわけですが、この句集自体、出句者七十五名の殆どがホトトギス系ですから、先月号で私があげつらったような句がならんでいます。しかしです、詩歌の毀誉褒貶については今さらいうまでもないことですし、私の難じた句を可しとするかたがあって当然。そしてそういうつもりで私自身も禿筆を呵している次第。

吟行のご案内（大宮氷川神社）

日　時　六月一日〈土〉十一時

集合場所　JR大宮駅

詳細未定

申込〆切　五月三十日

電話　090-9828-4244

佐藤喜孝まで

獐回頭

高島茂　選評

冬の田螺水槽にいのち展きたる
先住の熱帯魚に近づく田螺
田螺眠る水の流れに糞の糸
次つぎと田螺の子貝あふるるごと

吉弘　恭子

作者はタニシを水槽に飼って、観察したいという思いがあって、千葉の方から来る野菜売りのおばさんや、折にふれて千葉あたりに縁のある人にタニシがいたら取って来て貰いたいと頼んだが、千葉地方の田圃や水辺ではタニシは全滅しているようで願いは叶わなかった。そこで、岩手に移られた森るかさんに頼んだら、願いが叶ったという事らしい。タニシは淡水産の巻貝で殻は暗褐色、広い角質の蓋をもっている。タニシは早春の野趣のある食べもので、佃煮にしたり、味噌和にして食すると味も格別である。私の知人で伊豆でタニシを飼育していた人がいた。広い敷地にビニールハウスを造り、その中に、いくつも水槽を置き、大から小までのタニシを数千匹は飼っていた。タニシはキャベツの葉をむさぼるようによく食べる。巨きなタニシは朱い卵を寒中でもべったりと身につけていた。巨きなタニシをリンゴ貝といって、近くの旅館の料理に使われていた。恭子さんのタニシは食べるのではなく観賞用である。水槽にいのちを展くタニシ、熱帯魚と一緒の住みかである。じわじわと熱帯魚に近づく。魚の方はなにか不気味にさっと身をかわすのであろうか。タニシ

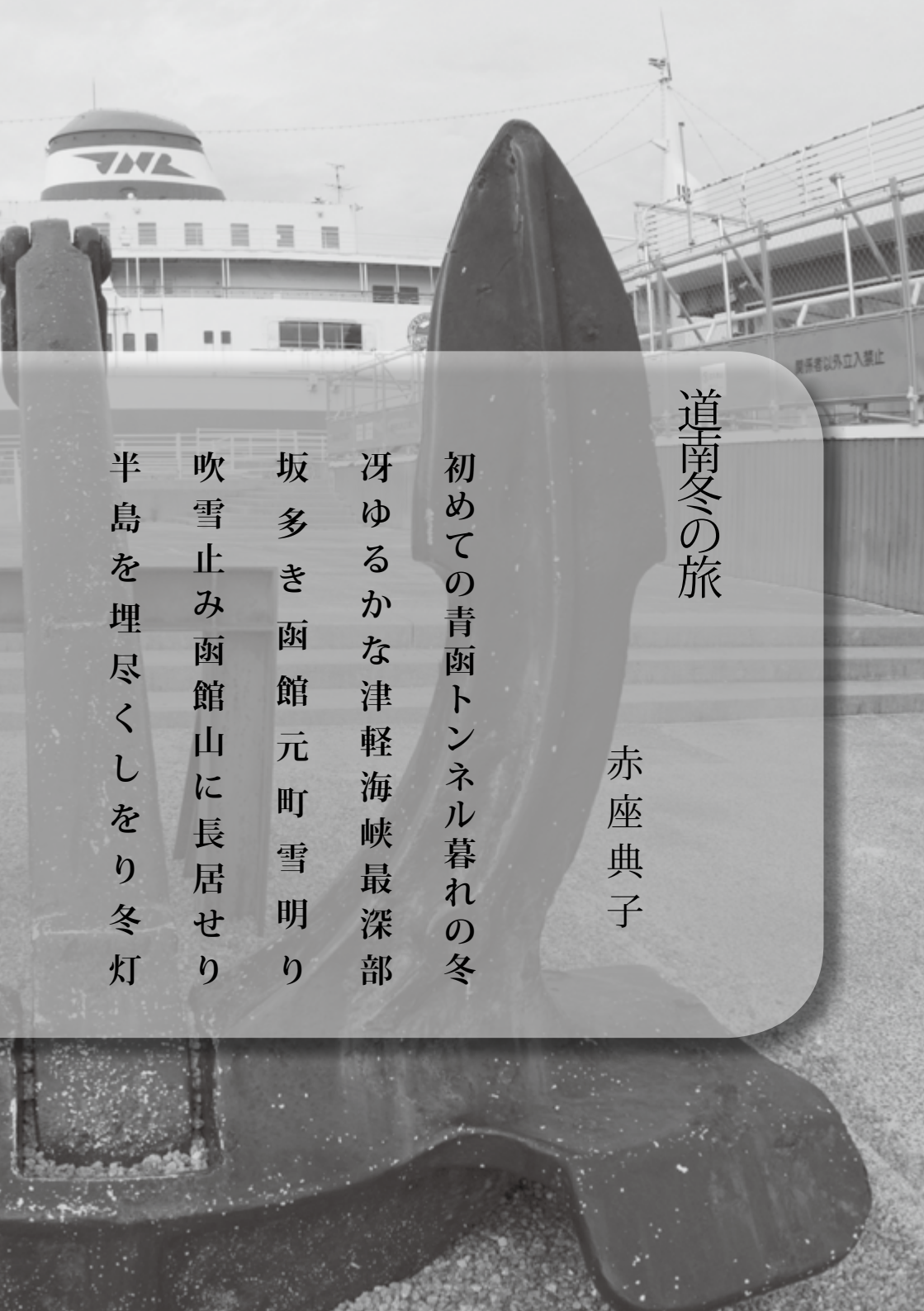
の糸のような糞が水槽に流れる。タニシの孵ったばかりの子貝が水槽からあふるるようである。一匹のタニシの抱く卵の数からみて、大変な数であることは確かである。水槽のタニシを毎日見あかず観察する作者。また新しいタニシの作品が出来ることとおもう。

デパートの箱より出でし兎の子
山吹の花も葉も食ぶ兎かな
タオル地をせつせと噛んで兎の子
兎の子死んでるやうに横たはり
兎の子動かぬ人の顔なめる

森　理和

兎をデパートで買ってきたのであろうか。部屋の中でいつも眼につく処にその箱は置かれている。大きくなったら、外の兎小屋に入れて飼うようになるのであろうが、まだまだ寒さ暑さには慣れていない子兎である。デパートの箱から外に出てそこらを歩く。山吹の花や葉を食べるとは知らなかった。若草や野菜などは食べるのを見ているから、花や木の葉も当然口に合えば食べてもおかしくない。動物の子供は、やたらとその辺の衣類とかを噛るものである。たまたま箱の中に敷いてあったタオル、それを噛んでいるのであろうか。時折、死んだように横たわって、飼い主を心配させることもある。また、じっとしている人の顔をせっせとなめることもある。動物の幼い時は実にかわいいものである。まして優しい兎の子は飼ってみると、ひとしお愛らしいものであろう。和子さんに飼われる兎の子は幸せである。丈夫で育ってくれることを願う。

〈一九九七年五月〉



道南冬の旅

赤座典子

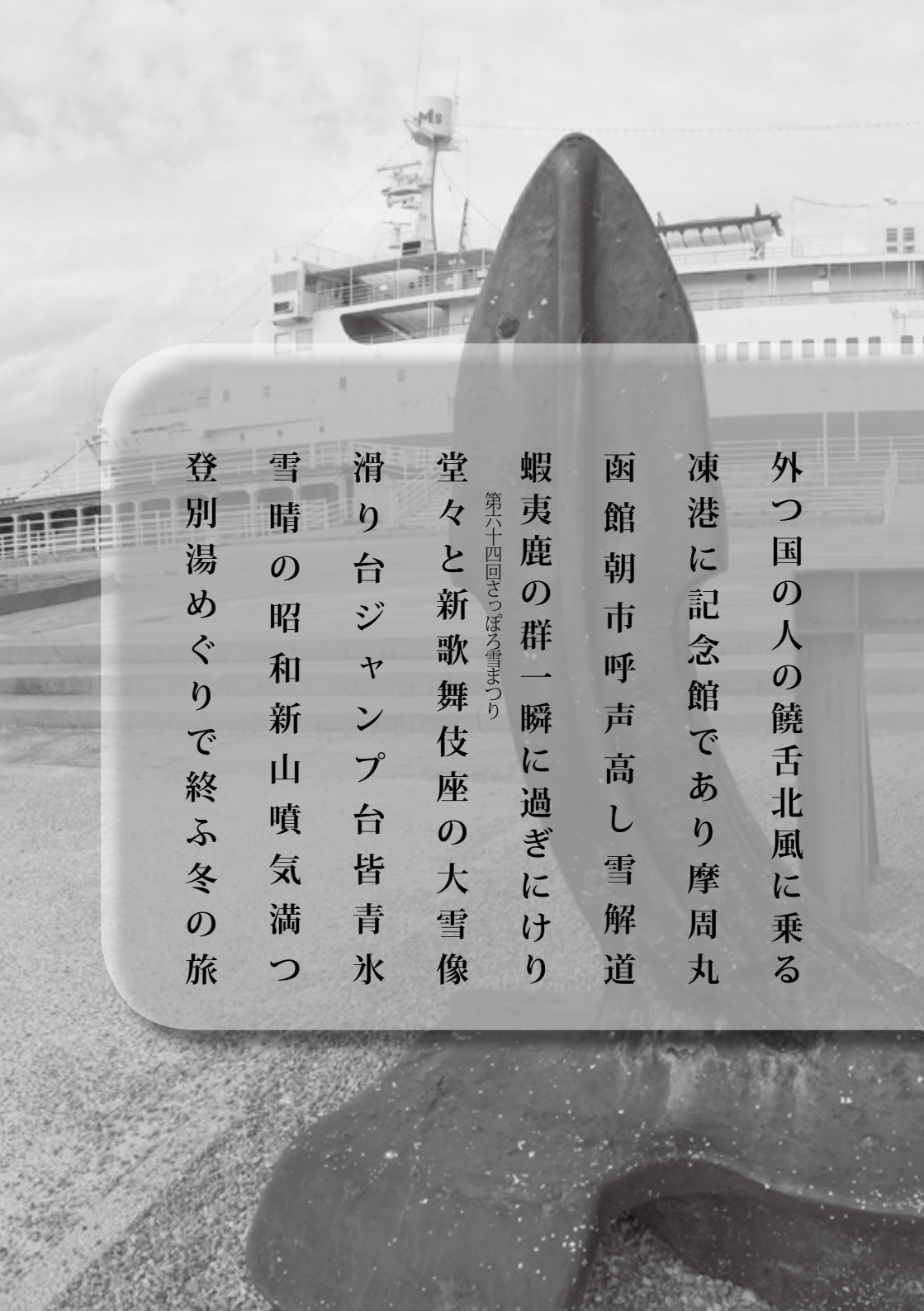
初めての青函トンネル暮れの冬

冴ゆるかな津軽海峡最深部

坂多き函館元町雪明り

吹雪止み函館山に長居せり

半島を埋尽くしをり冬灯



外つ国の人の饒舌北風に乗る

凍港に記念館であり摩周丸

函館朝市呼声高し雪解道

蝦夷鹿の群一瞬に過ぎにけり

第六十四回さっぽろ雪まつり

堂々と新歌舞伎座の大雪像

滑り台ジャンプ台皆青氷

雪晴の昭和新山噴気満つ

登別湯めぐりで終ふ冬の旅

あとがき

「八田木枯回想」が今号で擱筆された。最後は病床での痛みをおしての筆である。この頑張りを含め八田木枯氏への記憶、記録は友愛ゆゑの何ものでもない。さらに「長谷万木場販売所」のメモ箋を今も大事に保存されてをられたのだと知りこの念ひを更に深めた。そして「七座句会」で愉しさうに昔話などをされてゐた情景を思ひだす。一方が欠席だとだうしたのだらうと両氏が案じてゐた。お互い自分の人生、それも青春時代を共有する場を提供できたことは偶々ではあるが、「七座句会」の存在意義があったと我田引水してゐる。「八田木枯回想」は八田木枯と云ふジグソーパズルの大事な欠損部分を補って余りあるものになった。

寒林先生の原稿の最後は、

適当にまとめて〝終了〟して下さい。

痛みが去らないのでお許し下さい。

仰臥時間半日です。

とありました。一日も早く痛みが薄らぎますやうに祈念致します。

堀内一郎氏の文中に八田木枯氏が辛夷を眺めてゐた件があった。その句は、

花こぶし鳥語はルビのごとこぼれ

です。

（喜孝）

二〇一三年四月号

発行日　四月三日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　3371　4623

印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝

会費　一〇〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）

乱丁・落丁お取替えします。